

横浜港南台教会の中に「教会のターシャ・テューダー」と私が命名した女性がおられます。その後、彼女より高齢の「ターシャ・テューダー」が会員になりました。後者を別名「霧笛ヶ丘マダム」と私は呼んでいます。お二人とも広い庭をご自分のアイデアで草花、果実で彩り、楽しんでおられ、ガーデニング大好き人間であることを自他ともに認めておられます。「教会のターシャ・テューダー」のお宅で家庭集会が開かれていました。リビングの広いガラス戸の向こうに季節ごとに植栽の変化を楽しめる広い庭が広がっていました。集会を始める前に庭を眺めて、あれこれ質問したほど、楽しい美しい庭でした。「霧笛ヶ丘マダム」は眺める庭というよりは、ご自身の趣味の草木染、機織りのための草花を育てるための庭を作っておられました。



今日は本物のターシャ・テューダー(1915-2008)の生誕100周年記念映画「ターシャ・テューダー 静かな水の物語」を見ました。私はターシャ・テューダーは、絵本を見せていただいて知った名前でした。実際のターシャはボストンの名家の令嬢でありながら、社交界に馴染めず、田園生活に浸ることが生き甲斐で、田舎に引っ込み、絵本作家として生計を立て、4人の子供を育てた女性です。四季の変化を楽しめるバーモント州の山奥のコテージで一人暮らしをしながら、庭作りを何よりも楽しみ、200年前の暮らしぶりに思いを馳せ、自然と一体となり、自給自足を図り、手間暇かけて生活を味わう、静かな穏やかな老後を過ごされました。土に素手で触れ、愛おしみ、小動物とも、共に暮らしました。「毎日草取りばかりしている」とも言っておられました。

彼女はお金持ちの家に生まれましたが、両親の愛情にはさほど恵まれませんでした。むしろ、彼女の子守だった女性との関係が温かいものだったようです。けれども文化的な面で、両親から多くを与えられ、彼女の精神を養っていったことも事実です。結婚生活も破綻し、シングルマザーでもありました。子供の時から忍耐することを学ばせられたし、「忍耐して夢を実現する努力をすれば、必ず夢は実現する」ことを体験してきたのです。彼女のコテージに電気が通ったのは1965年だということです。ロウソク作りの映像もありましたが、水道、ガスなどの日常生活に不可欠と思えるインフラもなしに、夢に向かって、自分の好きなように生き続けました。彼女はニュー・イングランド精神、つまり、開拓者精神と敬虔主義が私の原動力でしょうとも言っておられました。彼女の庭は日本庭園の様式美とは全く違います。草花がそこで成長したいと願っている所があるから、そこで育つように、育てるというポリシーで、自然にまかせているのです。それが不思議に全体として調和して美しい庭になっています。広大な庭には池があって、その水が澄んでいます。その水が命の水となっているように、ご自身も澄んで、静かに生きることを大切にしてきました。

彼女の生き方、また、庭の美しさはガーデニングを愛する人々の憧れのようにです。映画館もかなりの観客でした。植えられた所で、忍耐して、芽を出し、蕾を膨らませ、花を咲かせ、実をつける植物の健気さ。そんな植物を育てる者こそ、「命の喜び」を実感できるのでしょう。